

日本人の、日本人による、日本人のため にならない捏造：II

田辺敏雄氏の力作「**検証 旧日本軍の悪行；歪められた歴史像を見直す**」のはじめにの部分を引用させてもらおうと、

・・・「歴史カード」を支える日本軍の「悪行」は、そもそも事実と確認されたものなのだろうか。また、確かな根拠があつての報道だったのだろうか。ところがこれらのほとんどが報道の名に偽しなはずさんなもので、不必要な「歴史カード」を相手国にあたえる愚をおかしたばかりでなく、誤った歴史認識に国民を誘導し、われわれの安全をも危険にさらすものなのである。

報じられた残虐事件、残虐行為に疑問を持ち、調査をはじめて10余年が経過した。ことの性質上、中国に関するものが大部分であったが、調査を通じて痛切に感じたことは、こんないいかげんな事実関係のうえに、わが国の近現代史が成り立ち、こんなウソ話がまことしやかに教えられ、贖罪意識が醸成されていたのかということであった。

日本軍の悪行となれば、「被害者」「加害者」のいうがままに、競うがごとく報じるマスメディア、それに追随した学者や進歩的文化人、簡単に謝罪する政治家の姿がそこにあった。だが悪行が事実かどうかを確かめる「検証」という2文字が、見事なまでに省かれていたのである。

本書は（それらのことを）検証した報告である。

目次だけを抜粋すると、

1. 東京裁判史観への道
2. 手記「三光」に秘めた小田少佐のシグナル
3. 七三一部隊「コレラ作戦」の大いなる虚構
4. 「中国人8000人強制連行」を検証する
5. エスカレートする証言
6. 城野宏の「三光作戦」証言
7. 抑留生活と「洗脳」について
8. 「自筆供述書」を残した3人の師団長
9. 鈴木啓久団長の供述と回想
10. 総検証「中国の旅」報道
11. ニューギニア、ベトナム、ハイラルの日本軍

12. メディアが誘導した危険水域

三光作戦とは、「殺し尽くし、焼き尽くし、奪い尽くす」作戦をいう。彭徳懐が自伝に「殺光焼光槍光」は日本軍が実行し、三光と名付けたと書いたが、日本語では光を悪い意味で使う習慣はない。うそに決まっている。ハイラルは同じく中国で、ベトナムについては先に述べた。ここではニューギニア戦を引用させてもらう。

ニューギニア戦線

朝日新聞・週刊朝日が報じた性奴隷、強姦殺人、人肉食。

日本陸軍最後の組織立った抵抗をアイタベ戦というが、これ以降の1年間で、

殺害	3497 人
強姦後殺害	5164 人
性奴隷	12714 人
人肉食の犠牲	1817 人
化学兵器による死傷	1867 人 などなど

「検証」というのは、両者の言い分を聞くことである。これは現地人（被害者と称す）の報告であり、「また朝日か」とボクなどは思うのだが、日本兵の視点をまったく調査していないのである。そして報道のたびに被害者数が増加していく。

日本軍は東部ニューギニアで、食糧の補給もなく、武器弾薬の補給もなく、4000メートル級の山を越え、あるいは海岸沿いに、3年で16万人の将兵を失い、生存率はわずかに6%。（・・・このとき、台湾の高砂義勇隊が活躍した。）

奥村正二「戦場パプアニューギニア」に、「東部にも西部にも慰安婦はひとりもいなかった。兵隊とパプア女性との間には性的接触が全くなかったようだ。これに類する話は聞いたことがない。当時のパプア女性は例外なく熱帯性皮膚病に侵されていた。そのうえ蚊除けのために特異な臭いの植物油を体に塗っていた。これらが、兵隊除けにも作用したのだろう。」

陸軍・海軍の、40人以上の生き残りに取材したところ、回答にほとんどブレがなかった。一部を紹介すると、

「之が日本の一応一流と目されるマスコミのする事かと驚きあきれるばかり、腹立たしい限りです。ニューギニアの苦難の中で戦って来た私共戦友達の目からは許し難い出鱈目報道と嘆かしてほしいばかりでなく、之が何も知らぬ一般読者に与える悪影響が憂慮される次第です」（黒崎薫 終戦時大尉）

「戦争の実態、戦争の悲劇も知らない者が、よくもこんな記事を書いたものだと憤慨に堪えない。現在自分が平和な日本で暮らしておられるのは誰のお蔭なのか。祖国のために散華した兵隊たちのお蔭ではないか。・・・地獄のニューギニアで散華した戦友達は、母のいる祖国に還りたくてもジャングルの土となって未だに返れないのである。戦友の慟哭が聞こえて来るような気がし筆が震えて書けない。」(諸田照吉 陸軍航空部隊曹長)

軍属として、現地人を説得しながら食料集めに苦勞した後藤友作は、「生きて帰ってきた一人として、こんなくやしいことはない。」

敗残兵は食べるものもなく、やせ衰えて幽鬼のように三々五々、杖をつきながらトボトボと歩きながら、現地の人に食料を請い、途中は散華した同胞が倒れて、悪臭をはなつ。日本兵の姿は、疲労の色が濃く、ぼろぼろの服、ぱっくりと口を開けた靴を蔓でからげ、腰には尻当てをだらりとたらし、杖をついてよろよろと歩く。これが申し合わせたような日本兵のスタイルであった。栄養失調、マラリア、大腸炎などで消耗している。現地人(当時は現代よりもっと不潔)は異様な臭気、排便後は肛門を土でこすって始末する。女性がいたとしてもそれどころではない。

生還者は米豪連合軍との戦場になったことで、パプアニューギニアの人たちに迷惑をかけたとの認識と、彼らからよくしてもらえたからこそ生きのびたとの感謝の気持ちを強くもっている。現地人に対する悪感情などまったくといってない。(そういう彼らが現地人に危害を加えるなど考えようもない。)

堀江正夫作戦補助参謀少佐は、一連の報道について「荒唐無稽なのは常識で考えてもわかるではないか」「第一強姦が事実なら、混血の遺児がたくさん出たはずですが。しかしニューギニアに遺児はひとりもいません。」これを調べた人も何度も現地に行き確かめている。白人との混血児はいたが、日本人との混血児はいなかった。

食べる物がまったくなかったことから、人肉食は、日本兵同士によるのはあった可能性はある。田中兼五郎中佐は、戦後のラバウル裁判で「日本軍の緊急処断令で、30名は人肉嗜食の罪によるものであった」と証言している。また、これを証言したものの話では、「中隊本部や隣接部隊の要請」となっているが、「日本軍人として、たとえ飢えてもそのようなことをするわけがない」と明言している。

「ニューギニア戦線では爆撃が激しく、その被害を防ぐために極端な分散態勢を取っておりました。その上に情報手段も全くなく、軍司令部でさえ内地との交信が不自由でしたから、この部隊間の交流、隊内の交流など皆無で・・・」ジャングル内では500メートルも離れると互いの位置は全くわからない。

「飢餓の極致の果てに起きたものと考えれば、それは密かに行われた所業ですから、関係した人のみがその事実を知り、それ以外の人には知らせがありません。」(別の人は、「人肉食など日本軍が記録するはずがないじゃないか。」・・・さらには、現地で最後まで日本軍に味方をして戦後、罪に問われたカラオ大酋長がいる。勇敢な彼らが、もし日本軍兵士が現地人を殺して食べたなら、黙っているわけがない、必ず報復を受ける。)

「日本軍はオーストラリア人に何をしたか」ラバウル裁判で「真実こそ力である。真相を明らかにしさえすれば被告は救われる」と弁護士は考えていたが「それはまったく甘かった。彼らは真相を求めているのではない。処刑・処罰の手掛りを求めているだけだと悟った。」

アイタベ戦のあと、自活の道を求め、再起を待つといっても、当面は現地人から食料を分けてもらうしか方法がない。

日本名を「カトウ」という酋長のいる村落に数人で居候となった尾川正二下士官は、このときの現地人について次のように記している。「未開といわれる彼らの、内面の明るさ、ある意味の気高さは、人間の本源に根ざすやさしさからくるもののように思われる。伸びやかであり、広い。」だが戦場では、日本側につくか連合軍側につくか選択を迫られる場面がでてくる。日本軍は武器を渡したことはなかったが、豪州軍は現地兵(土民兵)を組織し銃を持たせた。昭和19年12月のチンブンケ村で、19人いた日本人が18人殺害、1名重傷。日本の報復が起こる。浜政一大尉は、手記で150人を殺害したとしている。逆のケースもあり、病院に対し顔見知りの現地人が平賀病院長以下20人を蛮刀などで殺害した事件が20年8月9日に起こった。「戦場パプアニューギニア」によれば、「戦場で倒れた死傷者に対するパプアの対応は、豪州兵の感情に決定的な影響を与えた。死者は敵味方の区別なく丁重に葬る。負傷兵はいたわりながら、はるか後方の基地まで送り届ける。倒れている日本兵も同じ扱いを受け捕虜となった。豪州兵の間に深い感動がわき起こったのは当然だ。」とあり、豪州兵の家族への手紙には、例外なくパプアへの感謝の言葉が書きこまれていたという。

現地人はわれわれ現代人になく、あるいはとうとう忘れていた「やさしさ」を有していたのではないか。現地人を悪くいう人にならなかつたことがない。・・・筆者思うに、われわれは、何か大切なものを忘れたか、捨て去ったのではないか。)

不幸な出来事もあったが、アイタベ戦以降も両者の関係はおおむね友好的といつて間違いのないと思う。でなければ、最後まで日本軍に協力し、その罪により3年間投獄

(判決は絞首刑) されたウエワク一帯を支配するカラオ大酋長のような存在があるわけがない。……彼らを敵にまわしたら生きていけない。宇佐美晃曹長は現地人から兄弟のように助けてもらったといい、「原住民が親切にしてくれたので、私たちは日本へ帰ることが出来たのです。今でも感謝して居ります。」

また、化学兵器については、見たこともなければ聞いたこともない、と元兵士たちは口をそろえる。

この一連の報道に共通するのは、新聞記者が裏づけをとろうと考えた気配が見られないし、現に裏づけを一切とっていないことだ。現地も踏んでいないのではないか。何が目的で旧日本軍兵士を侮辱しようとするのだろう。

と、まあ、ニューギニア戦だけでもこれだけの労力を費やしておられるのである。他の「捏造」も否定してまわるのがいかに大変な作業だったか！

田辺氏はさらに、「今日まで朝日新聞社の日本軍にかかわる誤報を数えあげたらきりがない。」とも書く。新聞社側からの訂正や謝罪もない。

平成10年8月、「記憶はさいなむ」の表題で連載され、「後悔しない、うそじゃないから」と報じた元兵士(註：吉田某のこと)の慰安婦連行の話が、真っ赤なウソであったことが秦郁彦・日大教授によって指摘された。中国の毒ガス事件も捏造だった。(これらの件については別に書く。)

これらの報道に共通する点は、繰り返すが、記者がウラをとろうと考えた気配が見られないし、現にウラをとっていないことだ。(そんなもん、当事者の日本人に聞いたらすむことである。然るにまったく電話による問い合わせもないという。)……こういう報道姿勢が自浄作用によって是正されると期待するのは幻想と思う。事実を知ってもらう以外に方法はないだろう、だから書いている、とも述べておられる。

2014. 07. 07.